

矢掛の花めぐり、新緑めぐり  
2022.4.6→19

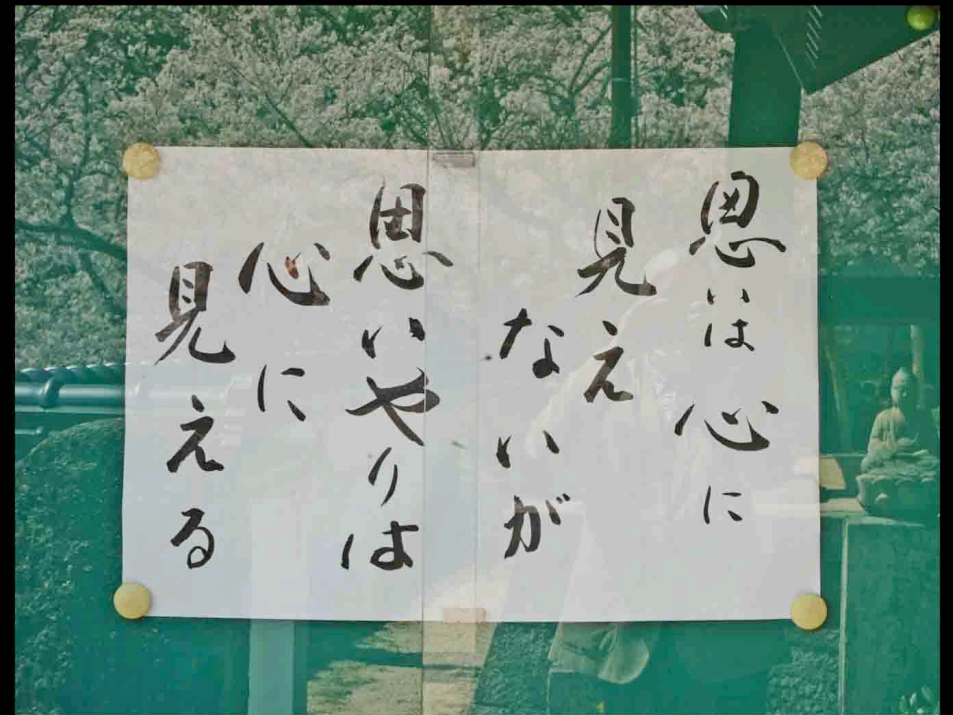
2022. 4. 6



桃源郷羽無（はなし）の里:山には山桜、里には桃が咲き、ようやく春がきた。田舎で剪定作業をして暮らしたいという都会人(大学同期)を羽無にご案内。見渡せば剪定の材料はまあ、山中にいくらでもある。

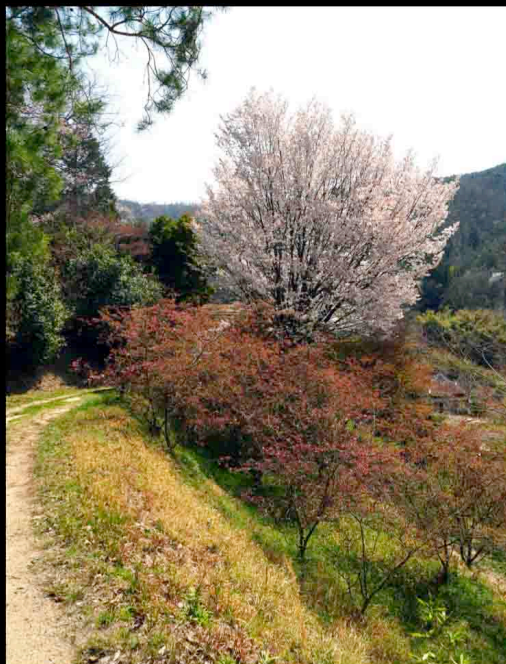


この施設「桃源郷はなしの里」は地元の住人10人ほどで土日のみ営業している、休憩、宿泊施設（キャンピングカー泊+山小屋風宿泊）、BBQ、ピザ作り、農業体験等ワイルド派向き。一人キャンプで星空を眺める人もいてなかなか人気が高い。



はなしの里から左手の山裾にある曹洞宗の禅寺・吉祥寺に参拝。山門脇に掲げられた禅問答わかるかな？  
境内の西側には大きな縁結び観音が佇み、良縁を祈ってくれる。その手前にある植木（モッコク？）を見た剪定家は、「枝がこみすぎていますなあ」とコメント。こちらは矢掛に移住して剪定してくれればなあと密かに期待。





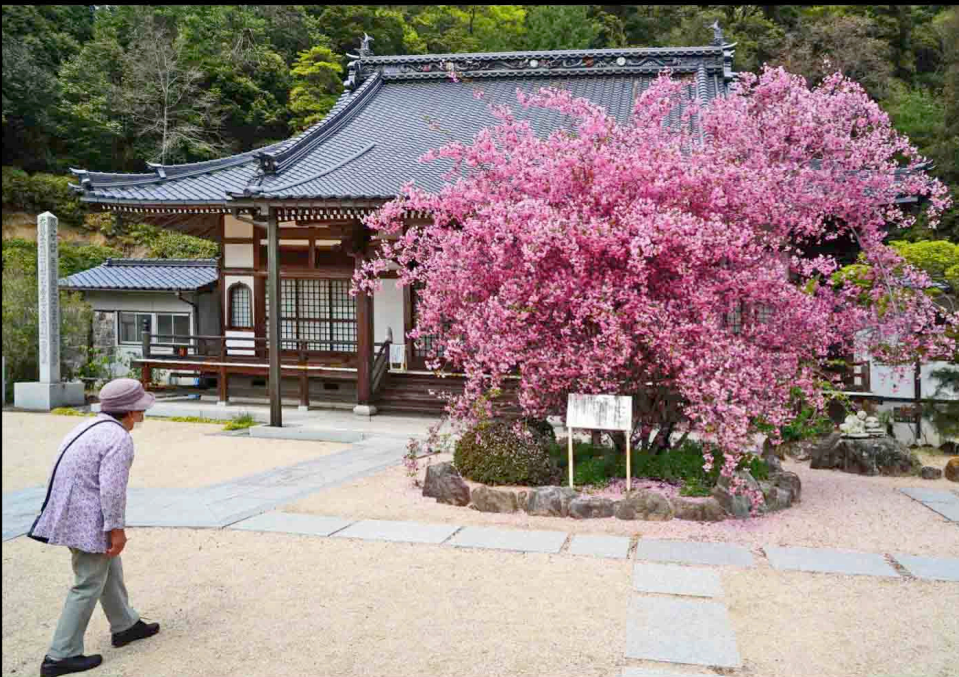
境内に入るとこの寺自慢の海棠の花がほころび始めている。桜はもう満開。毎年4月中旬には海棠まつりが開催されていたがコロナ禍で昨年も今年も中止。「木は剪定なんかしないでまっすぐ伸ばせばいいんです」、寺の西側の山中の桜を見て剪定家らしからぬコメント。確かに、都会と違って田舎の樹木はのびのびしている。剪定家はこの地に満足だった様子で寺をあとにした。さて、矢掛に帰って来るだろうか？



2022.4.12



剪定家は東京へ戻り、1週間後ぼくは海棠の満開の状態を見に改めて吉祥寺を訪ねた。満開の海棠はいささか白みかけながらも絢爛豪華な姿を見せていた。先客のおばあちゃんが一人、よほど気に入ったのか正面から挑む様な姿勢で海棠を睨みつけている。ぼくが写真を撮るのに気付いて、脇にどこうとしたが敢えてお願いしてそこにいてもらった。春の生命力を満腔で吸い込んで元気になるとする様な気迫が感じられた。





寺の西の山でも海棠はみごとに咲いていた。伸び放題の桜は赤っぽい新緑に変わっていた。おばあちゃんはこの地の住人の伯母に当り、この日、かつて話だけ聞いていた海棠をおじいちゃんと一緒に見にやってきたのだが甥の家がどこか分らないという。聞けば甥はぼくも知らないわけではない。お宅までご案内したところ3人の久しぶりの出会いのお役に立てた。この1週間間に大学卒業以来50年ぶりの同期との再会、そして知人の親族との再会のお手伝い、そして海棠との再会と3つの出会いをした。いい年になりそうだ。感謝、感謝。





海棠を見たついでに。この時期のもうひとつの矢掛の花の代表、囀勝寺の椿を見ることにした。山の中の羽無とは全く違う小田川沿いの盆地の底の平地だがわずか15分ほどで移動できる。コンパクトシティ矢掛のおかげだ。そしてここには吉備真備のおばあちゃんのお墓がある。今年の椿はあまり元気がなかった、今年はどうだろう？と気になった。丁度満開で、花の数こそ例年ほど多くはなかったが樹勢は復活した様だった。これで4つ目の出会い。春にはいつも出会いが待っている。



## 2022.4.17 春はたけのこ

移住して9年、毎年春には村人から掘り出したばかりのタケノコのお裾分けをいただいていた。東京で食べた折にはえぐくてあまりうまいとは思えなかった。それがここでは違う。いただいた朝採れをそのまま焚火にくべ、ぐつぐつ煮音がたってきたところで火から取り出し、一寸醤油をかけて食べると実にうまい。それを楽しませてもらってきた。

昨年、隣のAさんに猪避けの柵にする竹が欲しいがお宅の山から切ってもいいかと聞くと、いくらでもあるからどうぞという。村の外れの峠の山だ。早速5本ほど切って柵にした。節の間が均等間隔のまっすぐな竹＝真竹で立派な柵ができた。

ついでに図々しくもタケノコをとってもいいかと聞いた。すると何の手入れもしとらんからろくなもんは生えんがそれでよければええよとお許しがした。

と言った次第で、昨年はコロナとかで山には入らなかったが、この春初めて山に入った。恥ずかしながらこれまで自然の山の中でタケノコを採ったことは無い。

3月の末に息子や孫が来て試しに山に入ったが、竹が密生し、薄暗く、それに枯れて倒れた竹が乱雑に折り重なり、誠に無惨なぼろ山だった。やわらかなタケノコが生えるなどとは到底思えない場所だ。しかし、そこで次男の嫁が足の指先で枯葉の下の突起を探り当てた。タケノコ自前調達の第一号だった。有り合わせの小さなスコップで必死になって掘り出した。

嫁に先を越された形だったが4月中旬、自分で探るべく一人で山に向った。2週間前はやや季節が早かったのか見つかったのは1本だけだった。しかし、今回は地上に5cmばかりのとんがり頭を覗かせているタケノコがちらほらと見つかった。足場の悪い急斜面で、土は固く、回りを掘るのも楽ではない。根元には本体から栄養を運ぶのか白く丸い管状の根が何本もつながっている。土を掘り、それが出てきた所で根元にシャベルを入れ掘り上げる。無理やり抜こうとすると途中で折れてしまう。すると、途端に一体どこにいたのかと思うほど無数の羽アリが飛んできて白く瑞々しい果肉に群がる。結局収穫は4本。翌日さらに6本。初年度にしては大収穫だ。





こんなタケノコのとんがりを探すなかなかみつからない。先端が見えないほどのタイミングのものがおいしいとは言うものの贅沢は言ってもらえない。早速土木屋になって掘り出す。結果からすればこの程度なら掘り出してすぐに米ぬかをとんがらし入りの湯で処理すればえぐみは消えさくさくとして全く問題ない。



山土はガチガチに固い。やわなシャベルではなくツルハシが欲しいくらいだ。



折れたタケノコにはあっという間に羽蟻が群がる。よほど甘いのだろうか。



そのまま焚火にくべて焼くとほどなく焼きあがり香ばしく食べられる。あとは天ぷらが何より。ついでに初物のアスパラと新玉、ちくわの天ぷら、そしてたけのこ御飯。春の自家製ベストメニュー。



## 2022.4.16 やかげ新緑めぐり

つい2週間前はさくら、1週間前は海棠、そして今新緑。  
春の日々は追いかけるのも大変なほどその姿をめまぐるしく変えてゆく。

山が丸いボールの様な浅緑色の樹木におおわれると水田の準備が始まる。この時期を山笑うというらしい。尖っていた水も丸くなる。いちばん高いのが伽藍山。



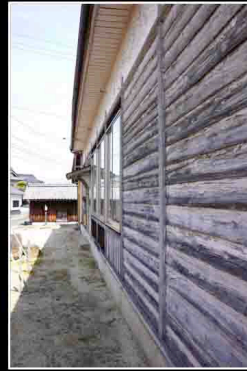
城江の長池。



飛鳥時代に制定された大宝律令で「里」と言う最小の行政単位が導入された。そこではほぼ50戸の家が集落をなし、賦役の単位として共同生活をしていたという。この地の山懐には今でもほぼ50戸の集落があちこちに点在している。ぼくの住む城江自治会の今年の登録戸数は1戸増えて46戸。歴史は否応無く今を規定している。



城江の里は中山の北斜面に広がっている。高台に立つと矢掛の中心街（！）の方が見晴らせる。この里が生まれた1300年前もきっと同じ様な景色だったろう。そこに再び新緑。



お帰り！



夏の朝のラジオ体操



通学路

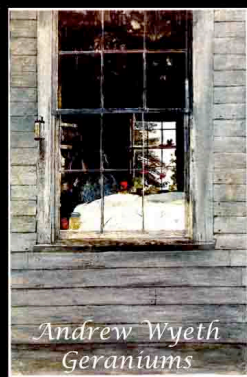
里の中心には必ず公会堂と呼ばれる集会所がある。年2回の自治会総会、小学生の集団登下校時の待ち合わせ場所、夏の朝のラジオ体操場、災害の場合の一時避難場所、生き生きクラブの活動場所と色々用途は有るがまあ頻度は少ない。

その公会堂は昭和5年に建設されて92年を越えた。これまでも時折修理してきたが雨漏りがするし、トイレなどの使い勝手も悪くなった。防災上の必要性も高い。

そこで100周年を前に大改修計画が持ち上がり、昨年から3年計画で各戸12万円、基金総額目標540万円の積立てが始った。これを達成すると町から同額の助成金が出て改修ができる。住民のやる気を見極めるシステムだ。1戸と言っても一人暮らしの家も、孫子3代10人を越える家もあるが積立金は一律同額。一人当たりで考えれば随分と不公平だが、ここではとにかく律令時代からの家単位でことが運ぶ。

この建物の設計者は不明だが大正4年(1916)、矢掛中学(現在の高校)に江川三郎八なる県の建築士の手になる明治記念館という建物が生まれた。この建物を真似して、14年後の昭和3年には弦橋の先に「江川式」とも言える交譲会館が生まれた。そして、姿形が正に江川式である城江公会堂がその2年後に生まれた。

当時の城江には新しい良いものを真似しよう！おそらくそうした気概が横溢していたのだろう。その建物が改修される。100年を経ようと言う下目板ばりは雨風にさらされてアメリカの画家アンドリュー・ワイエスのゼラニウムを思わせる見事な姿を見せている。改修するとこの古さはどう残されるのだろうか？ 無理か？

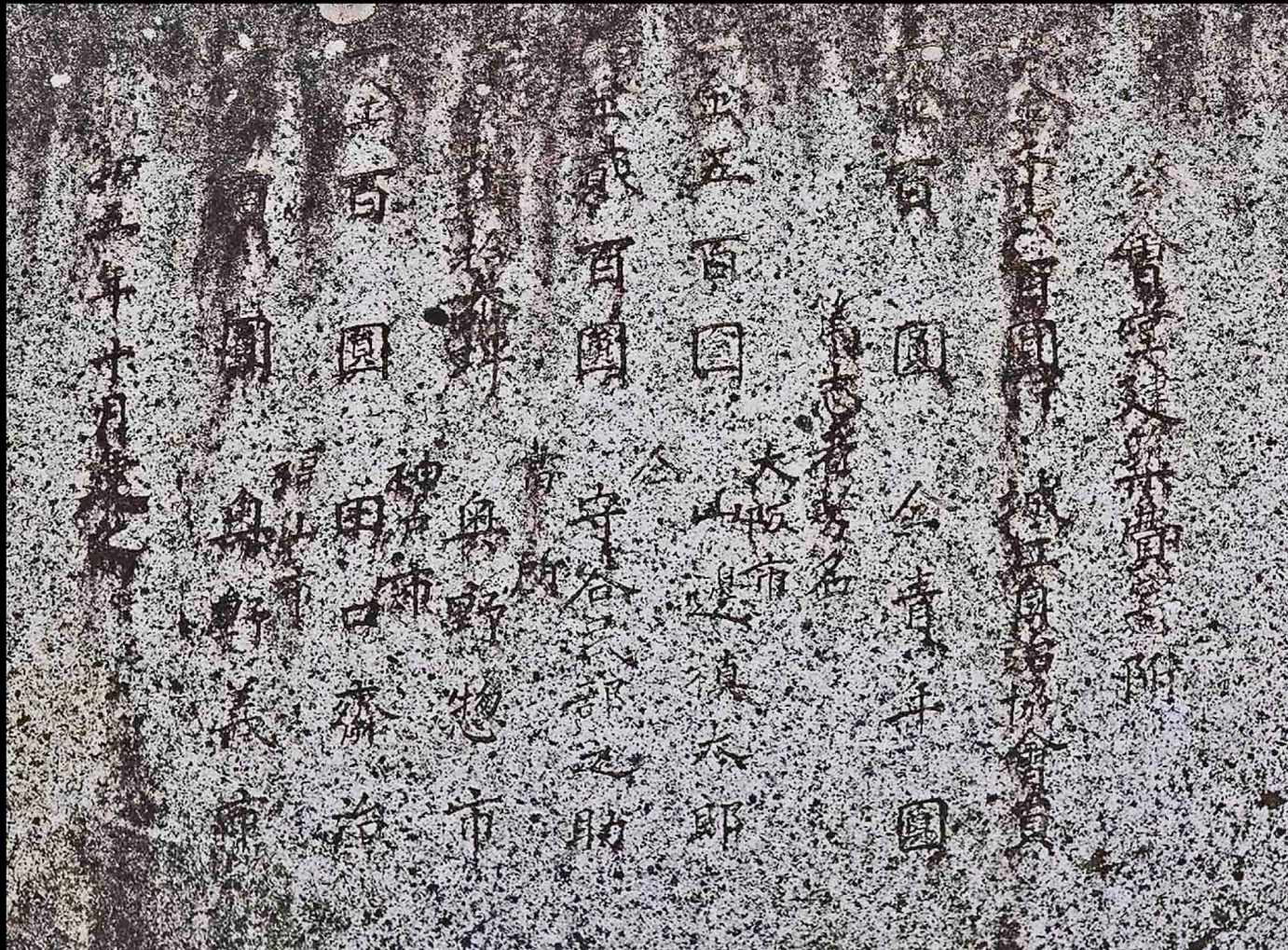


交譲会館は脇本陣当主高草家6代目の三男が当時の金で1.3万円を寄付、残りの2千円を地元民が寄付して作られた。今の約6千万円ほどにあたるうか。

交譲会館



## 大正5年10月の城江公会堂建立記念碑



1600円	城江自治協会員
100円	同 青年団
500円	大阪府 山部慎太郎
200円	大阪府 守谷民部之助
土地16坪	奥野惣一
100円	神戸市 田口齊治
100円	福山市 奥野義

合計 2600円  
 現在価値で1040万円（当時の1万円  
 =現在の4000万円）

ほぼ100年前の建設費は現在価値で約1040万円。負担内訳は自治会関係が960万円（92%）、その他個人の寄付が80万円（8%）と全額地元関係者負担だった。これに対し、今回の改修費は約1080万円と新築を上回る規模。地元負担は半額の540万円（50%）、残りが町負担。行政のあり方がかつてとは大分変わってきた証左だ。



5月の連休に向けて浅緑色の新緑は深みを増してゆく。風に翻る葉裏が銀色に光る